

写真屋の物思い

神戸のある一角に、古臭い写真屋が佇んでいる。

創業から言えば老舗となるのだが、現在のデジタルカメラとスマートフォンの普及をみれば、かなり経営が傾いた状態であることは容易に察しが付く。それでも顧客はついている。

写真屋の名前は「タチモトカメラ」という。

デジタルカメラもそうだが、銀塩を愛する人も、まだ多くいる。

そんな拘りの人たちは、フィルムカメラでないとはいないと思う通りの画が出せないという。その意見に賛同する主人、立本勇作はこの道三十年のベテランである。

若い頃、大手のカメラ店に入社して、カメラ販売と営業を行っていた。

まだ当時、現像とプリントは一般のカメラ・写真店では行っていなかった。

いわゆるメーカー送りでの現像を発注していたのだ。

フィルムには大きく分けて二種類ある。

ネガとポジだ。

一般の客はラチチュードの幅が広いネガを使う。

この場合、多少露出がプラスマイナスにぶれても、大体の画にはなる。

ところがポジの場合は可成りシビアで、露出がプラス、マイナス0.5ズレてしまつと、露出オーバーやアンダーに大きく左右される。

但し、これらをうまく調節して露出をコントロールした場合、素晴らしい一枚となる。

多くの銀塩を愛する人たちは、出来上がるまでのその瞬間を、待ち侘びるのが好きだ。

しかしながら、現実、フィルムカメラの使用率はかなり低い為、フィルムも全盛期と比べると恐ろしく値段が高い。

ポジであるダイレクトプリントなど、高額である。

その点に置いては、デジタルカメラであるとして、撮った瞬間に画が分かる為、失敗したらすぐに削除して、新たに撮ればよい。

しかもPCを持つていることも条件になるので、プリントせずともモニターに写し出して確認出来るメリットがある。

デジタルスチルデータを保存するメディアも、SDカード128GBなど安価で買える。

それでもフィルムを使うメリットは、やはり個々の拘りなのだろう。

「ゆうさん、久しぶり！」そう声を掛けながら店内に入ってきたのは、長年の常連客である浅田明というセミプロである。

「景気はどうよ？」にかつと笑みを見せる顔が、五十路を超えているとは思えないほどの童顔さが、いたずらっ子のようなものである。

立本が左手を振りながら、苦笑した。